

3/13 教訓を生かし、災害に備える 「防災フォーラム」

「防災フォーラム」は3月13日、川崎市民センター大ホールで行われ、約200人が防災の専門家の講演や自主防災組織の研修報告に熱心に耳を傾けました。

講演の講師を務めたのは、岩手大で県内の火山活動を研究している土井宣夫教授。「栗駒山の最近1万年間の噴火史と災害例」と題し、栗駒山が噴火した場合に想定される被害について、事例を紹介しながら説明しました。土井教授は「山の監視体制の強化が必要。また、噴火の影響で飲料水が使えなくなった場合の対策も講じるべき」と話し、警鐘を鳴らしました。

参加者からは「火山灰はどの範囲まで降るか」「東日本大震災の火山活動への影響は」などと質問が相次ぎ、防災への関心の高さがうかがえました。

報告で一関地域自主防災組織連絡協議会の熊谷典男会長(79)は、東京で行われた「全国自主防災組織リーダー研修会」の内容を報告。カスリン台風で被災した自らの体験を交え「災害発生時にリーダーとなる『防災士』の資格者を増やすべき」と訴えました。

同フォーラムは、市が2012年に制定した「となりきんじょ防災会議の日」に合わせて毎年開催。今年で5回を数えます。講演や防災組織などの活動報告を通じ、市民の防災知識の普及を進めています。



栗駒山では、少なくとも最近1万年間に水蒸気噴火が11回、マグマ噴火が5回起きています。噴火の被害は、噴石や火山灰だけではなく、酸性の水が磐井川に流れ込み、農工業用水や飲料水が3年以上使えなくなります。噴火の前には「火山性地震」が頻発します。登山をするときは、地震に警戒してください。マグニチュードが小さかったり、回数が少なかったりしても要注意です。日頃からの情報収集が命を守ります。



岩手大学教育学部地質学を専門とする
土井宣夫教授
八幡平市・64歳

2/19 地域全体で「当時」を振り返り 「もしものとき」に備える

中里まちづくり協議会の第2プロジェクトチーム(安全・安心の確保を推進するチーム)は2月19日、中里3～6民区の防災マップを完成させました。

同マップは、今年1月から作成を開始。一関市GIS地図を活用し、同地区内の危険箇所、避難場所、消防関連施設、災害時要配慮者の情報など、緊急時に必要な知識や情報を加えたものです。同地区の自主防災組織、民生児童委員、保健推進委員などの各分野の知識を集結して作成しました。

作成にあたり、チーム員は地域の特性や資源などについて学習。また、危険箇所などに足を運んで現地の確認を行いました。従来の防災マップと比較して、標高などの数値で表されていたものを地図

上に示すことで浸水区域などが具体化。漠然としていた地域の状況を正確に把握できるようになりました。

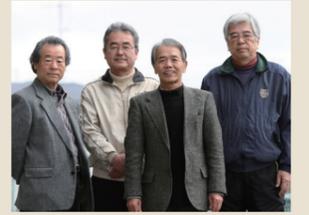
同チームの高橋喜久男リーダーは「震災から5年経過した。歳月と共に、当時の記憶は薄れてしまう。防災マップは、防災への意識を呼び起こすために役立たせたい」と話し、千葉仁サブリーターは「防災マップの完成がゴールではない。まず、4つの民区が先立ち、これから全13区に広げていく。作成した地図も、常に改善・更新していきたい」と防災への決意を新たにしていました。

今回完成した防災マップは、中里3～6民区分。中里市民センターと各行政区で保存し、地域の防災・減災活動に役立たせます。



中里まちづくり協議会第2プロジェクトチーム

高橋喜久男
千葉仁
寺澤喜憲
千葉政弘



中里は、カスリン台風などで水害に遭ったこともあり、自主防災意識は高い地域です。地域全体の防災マップはありましたが「自分の民区はどうなるのか」と疑問に感じ、民区ごとのきめ細かい地図が必要だと思っていました。作成する段階で、自分の地域の危険なところや安全なところを再確認できました。地域に住む人々には、備蓄をしたり、防災ハンドブックを読んだりして防災への意識を高めてほしい。日頃からの心構えが大切です。

「忘れない」という一歩
2016年3月、JAいわて平泉はあの日を振り返るため炊き出しを、一関図書館では、津波や地震に関する図書や防災グッズを集めた企画展を実施。そのほか、中里まちづくり協議会では、災害などの緊急時に備えて防災マップを作成するなど、それぞれの団体で「震災を振り返る」活動が開かれています。

東日本大震災を「運命だ」と過去の出来事にしてしまふのか、「使命だ」と教訓を未来へ生かすのか。今後5年、10年の私たちの行動には、地域の明日、まちの未来がかかっていると、言っても過言ではありません。

5年がたった今、私たちにできること。それは、愛する人の命や大切な財産を守るために、震災を振り返ることです。あの日、何が起きたのかを振り返り、何ができて何ができなかったのかを検証する。それが、震災の風化を防ぎ、明日への道しるべになります。

風化を防ぎ、明日に備える
NHKの「被災者7000人の声アンケート」(平成27年)によると「震災の風化を感じていきますか」という質問に対し「そう思う」「ややそう思う」と答えた人が78.6%。また「どのような場面で感じるか」という質問に対して「政府の支援策」「メディアの取り上げ方」「被災地以外の人との会話」の順に多くなっています。

震災の風化を感じる一方で、大切な人の命、家や仕事を失った人の悲しみやつらさは決して癒やされることはありません。

市は震災の記憶を風化させないため、震災の教訓を語り継ぐため、3月11日を「となりきんじょ防災会議の日」に制定。家庭、職場や地域で身近な人と防災について話し合い、災害に対する備えを確認する日に決めました。

3月11日は、犠牲者の冥福と復興を願うとともに、今後の進むべき道を考える日です。

2/26~ 視覚で訴える 震災の記録 東日本大震災展



東日本大震災企画展「5年目の3.11～風化させない、忘れまい」は2月26日から3月23日まで一関図書館で開かれ、利用客などが足を止めて展示に見入っていました。

同展には▶当時の広報誌▶震災、地震や津波に関連する図書▶非常食や非常用グッズなどを展示。市内の被害、被災地への後方支援や放射線に関する記録を確認できる内容になっています。児童コーナーには、児童向けの防災や地震に関する絵本などを展示。さまざまな視点から、震災を見つめ直すことができる企画展です。

展示した図書は、3月25日から貸し出しを開始。小野寺篤館長は「市民の皆さんが『3.11』を思い出すきっかけになってほしい。震災の風化を防ぐ一助になれば」と願っていました。

JAいわて平泉による炊き出しは3月11日、JR一ノ関駅前で行われ、駅利用者など約400人が地元産の食材を使った豚汁を味わいました。

開始式で、関係者らは約1分間黙とう。佐藤鉦一代表理事組合長は「悲惨な大震災から5年。復興支援を続けてきたが、まだまだ復興の道半ば。震災当時を振り返り『食は命』を実感してほしい」とあいさつしました。その後、JA女性部が調理した豚汁400食分を駅利用者などに提供。一関高専2年の菅原大樹さんは「おいしくて、心が温まった。今日は当時を振り返って過ごしたい」と大勢の優しさが込められた豚汁を味わっていました。

炊き出しは、震災当時を振り返り、食の大切さを実感するために企画されたもの。同日は、県内の各JAがそれぞれの地域でイベントを開きました。



3/11 あの日を振り返り 「食の大切さ」 思い出す